

2024 年度事業報告

1. 第 45 回大会の開催

第 45 回大会 期日：2024 年 6 月 22 日(土)～23 日(日) 場所：金沢大学 大会準備委員長：岸田由美会員、参加申し込み 278 名、個人発表 47 件(うち英語による発表 6 件)、共同発表 8 組(うち英語による発表 1 組)、ケースパネル 3 組、ポスター発表 24 組(うち英語による発表 2 組)合計 82 件の発表があった。

2. 『異文化間教育』第 60 号、第 61 号の編集と刊行、第 62 号の編集(学会誌編集委員会)

第 60 号：2024 年 8 月に刊行した。

第 61 号：2025 年 3 月に刊行した。

第 62 号：2025 年 8 月に刊行予定。

第 63 号：2026 年 3 月に刊行予定。

第 64 号：投稿募集中。

3. 特定課題研究・公開研究会・大会優秀発表賞の選考(研究委員会)

2025 年度の特定課題研究は、「発達の視点から異文化間で育つ子どもの経験を考える」をテーマとし、本年度も公募形式で発表登壇者を募った。7 件の申し込みの中から学問分野や研究内容の異なる 2 名、重松香奈会員(東京外国語大学)、本間祥子会員(千葉大学)と研究委員の小松翠会員(東京科学大学)を登壇者に、指定討論者を岡村郁子会員(東京都立大学)、山田 亜紀(玉川大学)に決定した。

【第一回公開研究会】

2025 年 1 月 26 日(日) 15:00～17:00 にオンラインで実施した。最大 47 名(内研究委員関係者 7 名)の参加があった。「発達の視点から異文化間で育つ子どもの経験を考える」をテーマに、自らの調査・インタビューを通して得た知見を発表した。小松翠会員は「日中間移動を含む中国人元大学院留学生のライフストーリー～留学開始と子育てとの両立、学位取得を中心に～」と題して発表を行った。重松香奈会員は「大人として振り返る外国にルーツを持つ子どもの成長と葛藤～言語選択の現実と母語継承支援への展望～」と題した研究発表を行った。「発達の視点から異文化間で育つ子どもの経験を考える」に焦点を当てながら、より当事者の経験と声にフォーカスと分析をあて、多文化また異文化で育った環境がどのように語られ分析されていくのか、また発達の視点に意識しながら、議論を更に発展させていった。

【第二回公開研究会】

2025 年 3 月 16 日(日) 14:00～16:20 にハイブリッド形式にて東洋大学赤羽台キャンパスで実施した。最大 54 名(内研究委員関係者 8 名)の参加があった。本間祥子会員は、「海外の日本人学校に通った子どもの経験とその後の人生における意味—大学生になった現在の視点から—」と題した研究発表を行った。次に重松香奈会員は、「国際結婚家庭で育ったこどもが抱えた葛藤とその解消—大人として振り返る発達の視点からの振り返り—」と題した研究発表を行った。最後、小松翠会員は「日中間移動を含む中国人元大学院留学生のライフストーリー—留学・就労・子育てとの両立を中心に—」をテーマに発表を行った。発表後、指定討論者の岡村郁子会員から、今回の特定課

題のテーマである発達の視点について、それぞれの発表者の会員がどのように着目しているかについて議論が提起された。また指定討論者である山田亜紀会員は3名の発表者の会員が応用した質的調査の方法論について、その意義と課題について議論を提起した。

【優秀発表賞の実施】

第45回大会で実施した。優秀発表賞審査委員会が審査をした結果、澤田彬良（ミネソタ大学大学院（高等教育研究））「複合的マイノリティ学生支援と当事者実態の乖離—LGBTQ+学生支援と留学生支援の狭間に立つクィア留学生—」に決定した。優秀発表賞受賞者の澤田彬良会員には、賞状および副賞が第46回大会総会にて授与される。

4. アーカイブ作成・オンライン読書会・研修会等の企画・実施（企画委員会）

【アーカイブ作成】

異文化間教育学会の発展に大きな役割を果たした会員の研究ヒストリーを対談形式で伺い、動画データとして記録した。

第4回 2025年3月17日（月）14:00～16:00 横田雅弘会員（聞き手 工藤和宏会員）

【オンライン読書会】

▶『多文化社会の学校と教師教育 ノルウェーと日本の国際比較研究から』（2024）大阪大学出版会
著者：北山夕華, 橋崎頼子 編集/今井貴代子, 川口広美, 久保美奈, 南浦涼介, 村田一朗, TonyBurner, TuvaSkjelbredNodeland, ÅsmundAamaas

2024年11月30日（土）10:00～12:00、参加者は12名（内委員3名）であった。

▶『継承ポルトガル語の世界：地域とつながり異文化間を生きる力を育む』（2024）ナカニシヤ出版
著者：拝野寿美子

2025年3月19日（水）10:00～11:40、参加者は19名（内委員3名）であった。

【第35回異文化間教育学会研修会】

2025年3月1日（土）13:00～16:00に、東京都人権プラザセミナールーム（港区芝2-5-6 芝256スクエアビル1F）にて第35回異文化間教育学会研修会を開催した。学校や地域社会等における多様性理解の促進や人権啓発の方法について考えることを目的に実施され10名（内委員3名）の参加があった。国際連合による人権教育の指針によると、人権を知識として学ぶだけではなく、人権を柱にスキルや態度を身に付けていくことが重要であるとされている。今回の研修会は、この指針に沿い、人権教育の発展経緯や人権プラザにおける具体的な実践を踏まえて行われた。このような手法は、異文化間教育の実践的な手法を検討するうえでも参考になるものであった。

5. 大会英語セッションの実施、学会誌英文記載の改善、研究活動のグローバル展開のための企画・実施（グローバル展開委員会）

第46回大会の英語セッション発表申込を行い、個人発表9件、共同発表2件、ポスター発表1件の申し込みがあった。発表後、大学院生対象にフィードバックを行う。

異文化間教育61号より英文の目次を掲載、英文要旨は各論文の後方に掲載した。

異文化間教育学会におけるグローバル展開に寄与する活動の支援を目的とする、グローバル展開補助金制度を開設した。第46回大会校から公開シンポジウム「グローバル・シティズンシップを問う：異文化間教育学は民主主義にどのように貢献できるか」の補助金申請があった。

6. 会員間の交流・ネットワーキングの促進、会員のキャリア・プランニングの支援（グローバル展開委員会との共同を含む）、教育関連学会連絡協議会の参加（ネットワーキング委員会）

【第45回大会交流会】

2024年6月22日（土）12:00～13:00、「ふらっと交流サロン」を開催した。参加者は36名であった。これまでのネットワーキング委員会主催のイベント参加者からの要望を踏まえ、今回のイベントでは、本分野に関連の深い9つのテーマ別のテーブルを設定（言語教育、留学生教育、多文化共生、国際共修、異文化コミュニケーション、多文化教育、異文化間心理学、移民研究、Mix）し、同じテーマに関心を共有する方々の間でのネットワーク作りが行えるように工夫した。同じテーマに関心のある方と知り合えて嬉しかった、横のつながりができてよかったといった感想が多く、研究・実践を共に深める仲間づくりができた。

【第1回ネットワーキング交流会】

2024年12月7日（土）10:00～12:10、「研究・実践・キャリアお悩み相談ゼミ」をオンラインで開催した。参加者32名（内ネットワーキング委員5名、グローバル展開委員4名）であった。今回、グローバル展開委員会とコラボをしたことで、複数の参加者がグローバルなテーマについて肯定的に言及し、グローバル展開委員会とコラボできた意義は大きかった。「お悩みゼミ」は大学院生や非会員がIESJの持つお互いの立場や視点を尊重しながらサポーターに関わるという特徴を体感できる貴重な機会であり、会員同士のつながりを深め、将来の会員獲得にも貢献できるイベントであることから、今後も継続されていくことが望ましい。

【第2回ネットワーキング交流会】

2025年2月22日（日）13:00～16:30、明治大学にて「多文化協働のためのグループダイナミクスワークショップ」を開催した。講師は平井達也会員（明治大学）、高木ひとみ会員（名古屋大学）、参加者16名（内委員5名）であった。体験的な学習を通して新たな気づきや今後の実践に活かせるヒントを得られたと感じた会員も多く、対面でお互いのインターアクションが多いワークであったため、会員同士の関係性も深められたように見受けられた。特定課題研究とタイアップしたテーマで研修を企画したり、AIやアートなど、新しいテーマについてワークショップを催したり、大学院生や若手でも参加しやすいテーマや方法で実施してみることも今後検討したい。

【教育関連学会連絡協議会】

2025年3月8日（土）教育関連学会連絡協議会総会に参加した。

7. 学会論文賞の選考（学会論文賞選考委員会）

学会誌56号(2022年)～59号(2023年)に掲載された研究論文（テーマ論文・自由投稿論文）、実践報告、調査報告、研究ノートのうち、依頼論文以外の選考対象13本の予備審査を行った。選考の結果、本間桃里会員（異文化間教育59号掲載論文）『非正規滞在の子どもの公教育からの排除のメカニズムーノンフォーマル教育の場における教職員への聞き取りからー』に決定した。本間桃里

会員には、賞状および副賞が第46回大会総会にて授与される。

8. 学会の中長期的な展望やその実現可能性の構想（将来構想委員会）

将来構想委員会では、主に異文化間教育に関わる新たな実践例の作成を行った。具体的には、まず、『事典』の項目のうち、特にダイバーシティに関わる項目にもとづくワークショップを企画し、中野ダイバーシティフェスタ2024において実施した。次に、『事典』活用プロジェクトを立ち上げ、『事典』の項目に関する複数の活動／ワーク案を作成した。そのうえで、第46回大会において、当該の活動／ワーク案およびその作成過程をポスターセッションにより公開した。

9. ニュースレター、ウェブサイトの更新、メールニュースの編集と配信（事務局、広報・ICT委員会）

2024年12月1日付でニュースレター第72号をHPに掲載した。57件のHP更新をおこない、情報を掲載した。また、「異文化間教育学会メールニュース」の配信は、学会活動や会員間交流に関する情報メールを163件会員へ配信した。

10. 学生会員支援事業（事務局）

第45回大会において、若手研究者支援の一環として、条件を満たす年次大会発表者の大会参加費を免除（返金）した。エントリー者9名の内5名が手続きをした。

11. 理事選挙の実施（事務局）

第45回大会総会の決定にもとづき、2025年度・2026年度の理事の選挙を2024年12月末～2025年1月末までの期間に実施した。本年度より選挙はWeb投票とし、選挙管理委員長阿部裕子（東京福祉大学）、選挙管理委員太田知彩（立教大学）が厳正なる開票作業を行ない、25名の理事が決定した。2025年3月29日に「理事長選出のための特別理事会」がオンラインで開催され、本学会会則第7条により、理事の互選によって、新理事長塘利枝子会員（同志社女子大学）が選任された。

12. プレセミナーの実施（事務局）

2024年6月21日（金）12:30～16:00 「多文化共生とドキュメンタリー演劇」というテーマでプレセミナーが行われた。参加者は25名であった。講師に萩原健氏（明治大学）、ファシリテータ岸磨貴子（明治大学）川島裕子（関西大学）であった。ドキュメンタリー演劇の実践を通して、多文化の日常でマイノリティー/マジョリティーの他者が覚えるさまざまな違和感や、多様な人々が経験する現実の出来事の多面性を、再発見・再認識した。

13. 会員数

2025年3月31日現在の会員数は、名誉会員15名、正会員828名、学生会員157名、通信会員14名、休会5名、維持会員3団体の計1019名・3団体。